

ポスト構造主義を超えて

統一思想研究院 大谷明史

(四) ジャック・ラカン

(1) ラカンの思想

ポスト構造主義は多くのことをフロイトの精神分析から学んでいる。なかでも精神分析を専門とし、「フロイトに帰れ」と叫びつづけたのがジャック・ラカン (Jacques Lacan, 1901-81) であった。

① 言語と人間

米ライス大学教授の仏文学者ジェーン・ギャロップ (Jane Gallop) によれば、「ラカンは、言語が主体を語るのもあって、話し手は言語を支配するのではなく、言語に支配されるのだと考えている⁽¹⁾」。人間が言語を操っているのではなくて、言語が人間を操り、支配しているというのである。

ラカンによれば、男女の性的差異の起源と発達は言語の領域内にある⁽²⁾。すなわち、「言語が男女を創った」ということである。さらにラカンは「シニフィアンの戯れ」がシニフィエを創り出すと言う⁽³⁾。言語学者のソシュールは、言語をシニフィアン(音、記号)とシニフィエ(意味)という二項対立的に唱えたが、ラカンはシニフィアンが最初にあって、シニフィエを創り出すというのである。シニフィアンとは単語の持つ音の側面であり、シニフィエとはそれに対応する概念である。

② 鏡像段階と自我の形成

ラカンは 1930 年頃からフロイトに関心を抱き、フロイトの研究を進めた。そして 1936 年に鏡像段階の理論を発表した。

幼児は手足の感覚を統一することができず、ばらばらに分裂したままで自他の区別も分らないが、鏡を見て自己像を得る。鏡の助けを得て「自我」(エゴ)を手に入れるのである。しかし、それは鏡像であって、イメージにすぎない。しかもその自我は鏡の中、つまり自分の外にある。結局、「自我」とは私(自己)ではなくて、自己の外にある鏡に写った自己である。そして私(主体)と鏡像とは決して一対一に対応するようなものでなく、私と自己像との間には絶え間ない葛藤がある。鏡像に由来する自我は、最初は輝いているが、やがてその輝きを失う。ジェーン・ギャロップは次のように言う。

鏡像段階は「目の眩むような急斜面」を登るための第一歩にすぎない。……自我は形成され始めたばかりで、……鏡像段階は、避けられない不安が始まる前の、歓喜に満ちたたまゆらの瞬間なのである。したがって、鏡像段階が悲劇の頂点である。宿命的な栄光にかがやく一瞬であり、樂園喪失の一瞬である⁽⁴⁾。

やがて「自我は最終的には堅固になり、精神を締めつける煩わしい苦悩の鎧となる⁽⁵⁾」というのである。

③想像界、象徴界、現実界

ラカンは「想像界」、「象徴界」、「現実界」という三界の理論を提示した。想像界はイメージや空想の領域のことであり、象徴界は幼児が想像界を離れて参入することを強られる言語の領域である。現実界は象徴化することのできないもの、すなわち言語の境界の外側にあるもののことである。現実界は、フロイトのいうエスと同様、未知で制御し難く、言葉やイメージとして固定できない領域である。カトリーヌ・クレマン (Catherine Clement) はラカンの三界の理論を想像界と自我、象徴界と超自我、現実界とエス (リビドー) というように、フロイトの構造論と対比させて考察した。

象徴界とは、言語と法よりもたらされる構造化の世界であるとされる。そしてそれは主体に去勢を課すものであるという。元ケンブリッジ大学の特別研究員のエリザベス・ライト (Elizabeth Wright) によれば：

ラカンにとって象徴界という次元 (= 審級) とは、主体が出現する場を形成する既在の言語の次元と法のことである。あらかじめ確立された言語と文化の法則にはさまざまな特徴がある。それらは主体を混沌とした幼児期の経験から生み出すものであると同時に、主体に去勢を課すものでもある。主体は去勢されることによって、取り返しがつかないほど分裂したものという運命を負わされ、想像のなかで行なうさまざまな同一化と、そこに侵入してくる現実界と、象徴界の法の要求とを結びつけられなくなってしまう⁽⁶⁾。

象徴界の法とは父の法であるが、子どもが象徴界に入るとき、その法の下に入る。英国の評論家、ソフィア・フォカ (Sophia Phoca) は次のように言う。

ラカンによれば、母の身体への幼児の一次的関係と、根源的な依存 (想像界と呼ばれている) は、子どもが象徴界の秩序に入るさいに抑圧される。《象徴界》とは、すべての言語的意味を構築する父の法である。母の身体に対するリビドー衝動を子どもが否認することによってのみ、《象徴界》は可能になる。《象徴界》は、法によって構造化された単声的言語のなかに、想像界の多型的リビドーや混沌を抑圧してい

る⁽⁷⁾。

ラカンは象徴界を想像界の幻から分離しようとした。すなわち、文学（想像界）から科学（象徴界）の方向を目指したのであった。ジェーン・ギャロップによれば：

ラカンによるその夢の説明の構造——「文」を特権化し、哀切感を従属させる構造——は、彼の著作にみられる。想像的な、興味をそそる、より劇的な比喩形象よりも、言語構造（象徴界）のほうを好むという方向を具体化している。……ファルスをペニスから喜んで分離しようとし、……象徴界を想像界の幻から選んで分離しようとする方向である。精神分析は、神話的なもの、劇的なもの、比喩形象的なもの、逸話的なもの、ひと言でいうと文学を排除することによって、科学の——まず言語学、次に数学の——方向に進もうとする⁽⁸⁾。

ラカンはフロイトの精神分析を数学的に、論理的に説明しようとしたのである。しかしそのために、かえってラカンの主張は難解なものとなっていることは否めない。

④他者

ラカンによれば、人間は他者との関係によって「自分」が形成されている。生まれたときから「自分」なのではない。私たちが「自分」だと思っているのは、本当は他者によって作られた作り物なのである。

ラカンは他者には小文字の他者（other）と大文字の他者（Other）があると言う。エリザベス・ライトによれば、小文字の「他者」は、子どもが鏡のなかに見る像、実際には断片化されている主体の本質を覆いかくす、実物以上に見える完全な姿を象徴している。にもかかわらず、このナルシスティックな完璧さのおかげで、主体はエゴを確立することができるのである。他方、大文字の他者（Other）とは、発話をする主体を確定するものである⁽⁹⁾。

小文字の「他者」は母親という鏡である。すなわち赤ん坊は母親に指示されて自分を作り上げていくのである。他方、大文字の「他者」とは父親である。しかるに象徴秩序をもたらす父親は、実在の父親ではなく、「象徴的な父」である。ラカンはそれを「父の一名」（Name-of-the-Father）と呼ぶ。それは法、掟、秩序であり、「言語」である。父の名とは、父親のもつ象徴的な禁止の機能を意味するものであり、言語による去勢を課すものを示すのである。

⑤対象 a

ラカンのいう対象 a について、エリザベス・ライトは次のように説明している。

言語の中に入ることによって根源的な喪失の対象である母親との分離が起こる。これは象徴界が現実界を自らの境界内に運び入れようとしても、どうしても必ず残余が生じ、アイデンティティ達成の失敗を繰り返し刻み込むことによっておこる喪失の経験である。象徴界はこの失敗を無視するが、主体はこの失敗を隠すために、失われたもの、対象 a の幻想を追い求める。主体がまだ幼い時期の、特定の何かや出来事が幻想を生むきっかけとなっており、最終的にはこれが喪失を埋め合わせる幻想を提供してくれる⁽¹⁰⁾。

対象 a とは、「存在していた人間の喜びの名残り」であり、「自己の存在を保証する幻想」である。京都大学教授の新宮一成が言うように、対象 a とその名残りを手に入れたいという情熱とが、諸々の社会関係の中に組み込まれて人々を動かしているのである⁽¹¹⁾。

⑥性的差異とファルス

ラカンによれば、性的差異の起源と発達は言語の領域内にあり、セクシュアリティは生物学的な性とは関係ないのである。エリザベス・ライトは次のように言う。

生物学的な男性が女性の側に、生物学的な女性が男性の側に、自分を刻印することができるということである。もちろん選択できるとはいっても、主体の無意識の歴史なるものから来るさまざまな要因に押しつけられた「強制的な」ものにはなるだろうが、発話をする存在のひとりひとりが、どちらの側にでも自分を刻印することを選択できるのである⁽¹²⁾。

ラカンによれば、性別化とは、われわれが男性とか女性という存在のあり方を無意識に「選択する」プロセスであり、われわれは社会的な場で性をもった主体としての位置を獲得するのだという。主体が象徴界（シンボルの世界）に入ることによって、性が振り分けられ、象徴的なジェンダーが授けられるというのである。

ファルス（phallus）とはペニスそのものではないが、西欧の文化的幻想や想像のなかでペニスの役割を果たしてきたものであり、男性の象徴とされる。ラカンによれば、男女の差異とは、ファルス機能がそれぞれ異なった作用の仕方をするということであるという。エリザベス・ライトは、ラカンの性別化の理論を次のように説明している。

ファルス機能、つまり去勢の機能——象徴界から要求される犠牲——が、男女によって異なった作用の仕方をするということ、女性は男性が失う必要のない何かを失っているというわけでないということ、またどちらの性もすべてをもつ、あるいは

すべてのものになることはできないということである⁽¹³⁾。

ラカンの性別化の理論について、カリフォルニア大学・バークレー校のジュディス・バトラー (Judith Butler) は次のように説明している。

女は《ファルス》で「ある」と言われているが、それは女が、男の主体という自己基盤的な位置の「現実性」を反映し、またそれを再^{リプレゼン}現前させる力をもっているという意味においてである。つまり女は、男性的な主体位置という基盤的な錯覚を打ち砕く力を (たとえ今は奪われてはいても)、理念的にはもつとされているのである。《ファルス》——すなわち、一見して男に設定されている主体位置を反映し、保証するもの——は、女である。そのような女は、ファルスで「ある」ために、男でないものになること、男でないもので「ある」ことが求められ、男でないという、その欠如の位置につくことによって、男の本質的な機能をゆるぎないものにしなくてはならない。だから《ファルス》で「ある」ことは、男という主体「のために存在している」ことであり、男という主体は、この「～ために存在する」ものを認めることによってのみ、彼のアイデンティティをくりかえし確認し、増大させることができる。……他方、男は《ファルス》を「もって」おり、けっして《ファルス》で「ある」わけではないと言われている。というのもペニス、そのような《法》と等価ではなく、《法》を十全に象徴化することができないからだ。だから《ファルス》を「もつ」という位置につこうとしても、それは必然的に、あるいはそもそもの前提として、不可能なのである。その結果、《ファルス》を「もつ」位置も、《ファルス》で「ある」位置も、ラカンの文脈では、喜劇的な失敗として結局は理解されることになる⁽¹⁴⁾。

男はファルスを持ちながらファルスでなく、女はファルスを持たないがファルスであるというのである。

⑦ラカンとフェミニズム

エリザベス・ライトは次のように言う。「男性と女性のあいだにきれいに境界線を引くことはできない。それぞれの主体が、違うところに境界線を引くからだ。性的差異はつねにジェンダーの差異を超越しているし、それ以上のものだ。……ラカンにとって性的関係などといったものは存在しないのだ⁽¹⁵⁾」。ラカンが提示した「性的関係などといったものは存在しない」、「女は存在しない」という理論は、まさにフェミニズムが待望していた公式であった。

(2) ラカンへの批判と統一思想の見解

①言語と人間

ラカンによれば言語が人間を操り、支配しているのであり、「言語が人間を創った」のである。これはまさに「労働が人間を創った」というマルクス主義、「自然選択が人間を創った」というダーウィニズムと同様な発想である。さらにラカンは、言語においてシニフィアン（音、記号）がシニフィエ（意味）を創り出すという。

統一思想から見れば、性相（性質、機能）と形状（形、質料）の二性性相において、性相が主体であり、形状は対象である。すなわち、形状は性相の担荷体であり、性相を表わすための材料であり、手段である。たとえば画家が絵を描くとき、絵具で美を表現するのであって、絵具から美が出てくるわけでない。

統一思想の観点から言えば、言語が人間を操っているのではなくて、人間が言語を操っているのである。そしてシニフィエはシニフィアンから出てくるのではなくて、シニフィエはシニフィアンによって表現されるのである。

②鏡像段階と自我の形成

ラカンによれば、自我とは私（自己）ではなくて、自己の外にある鏡に写った自己であるという。そして私と自己像（鏡像）との間には、絶え間ない葛藤があるという。

しかし私（自己）はあくまで私であって、鏡像が私を形成しているわけではない。鏡像は私の二次的、象徴的な像にすぎないのである。また私（自己）と鏡像が葛藤しているのではない。鏡像を見つめながら、私（自己）が成長していくのである。ラカンは歓喜に満ちた鏡像段階はやがて樂園喪失の悲劇に遭遇するという。これは母親に抱かれていた幼児がやがて乳離れしていく成長過程と見るべきであろう。

③想像界、象徴界、現実界

カトリーヌ・クレマンによれば、ラカンはフロイトの「リビドー」→「自我」→「超自我」の定式をふまえて、人間の認識の世界を「現実界」→「想像界」→「象徴界」としたという。現実界は赤ん坊の感覚が未分化の状態をいい、言語の境界の外側にある。想像界は鏡を見て自己を発見して分裂した感覚を統合する段階をいい、イメージや空想の領域である。象徴界は言語によって構成される世界である。

統一思想から見れば、幼児が生後間もない時には、霊人体の生心は未熟であって、肉身の要求で生きているが、次第に生心が成長し、知情意が発達してくる。知的な面からいえば、感性から悟性、理性と発達してくるのである。そのような幼児の成長過程をラカンは現実界（無意識）→想像界（感性）→象徴界（悟性、理性）として捉えたといえよう。

ラカンは、象徴界は主体に去勢を課すとか、抑圧するというが、そうでない。子どもが成長するにつれて、理性が発達してきて、肉身の欲求をコントロールするように

なるのであり、それを去勢とか抑圧というのは誤りである。

④他者

ラカンによれば、小文字の他者 (other) とは、子どもが自身を見る鏡であり、私は「自分」だと思っているのは、その他者によって作られた作り物であるという。そして大文字の他者 (Other) とは、象徴的な父であり、法、掟、秩序であり、禁止の機能をもつものという。子どもは、その大文字の他者の法のもとに身をおかなくてはならないが、それを言語による去勢という。

子どもは、小文字の他者によって「自分」が作られるというが、そうではない。母の愛に育まれながら自己が成長していくのである。またラカンは、子どもは大文字の他者によって去勢されて、法のもとに身をおくようになるという。

ラカンは大文字の他者は象徴的な父であり、法、掟、秩序、禁止の機能であるというが、なぜそのような他者が存在しているのか、明らかにしていない。統一思想の立場から言えば、神の言 (ロゴス) がわれわれの心の中に潜在しているのである。そしてそれはわれわれを去勢するものではなく、真の愛へと導く、愛の道しるべなのである。

⑤対象 a

対象 a とは、「象徴界が現実界を自らの境界内に運び入れようとしても、絶対に手に入れられない失われたもの」であり、対象 a を手に入れたいという情熱が人々を動かすという。赤ん坊のような、未分化の無意識である現実界の名残りが、人々を動かすという。

統一思想の観点から言えば、人間を根底から動かしているのは、幻想のような対象 a でなく、意識的にせよ、無意識的にせよ、「愛したい、愛されたい」という心情であり、さらにそこから生まれる創造的なビジョンなのである。

⑥性的差異とファルス

ラカンは、いったい何が性的差異をつくり出しているかと問い、セクシュアリティは生物学的な性とは関係がなく、性的差異の起源と発達と言語の領域内にあると主張した。ラカンによれば、性別化とは、われわれが男性とか女性という存在のあり方を無意識に「選択」するプロセスである。つまり主体が象徴界に入ることによって、性が振り分けられるというのである。

ラカンはまた、男性の象徴であるファルスの機能は男女両方に現れるのであるが、その機能が男女で異なった作用の仕方をするのであり、「性的関係など存在しない」と言う。フロイトにおいては、女性をペニスの欠如、ペニスを羨望する者として捉え、性的アイデンティティの形成において重要な役割を果たすのはペニスであるとしたが、

ラカンにおいて、男女の性的アイデンティティの差異は、ファルス機能の差異にあるとしたのである。

統一思想の観点から見れば、男がファルスを持ちながらファルスでないということは、形状（身体）においてファルスを持つが、性相（精神）においてはファルスでないということであり、女がファルスを持たないがファルスであるということは、形状においてファルスを持たないが、性相においてはファルスであるということになるであろう。しかし、なぜ、何を根拠として、そのような非合理的な論理が展開されるのであろうか。

統一思想から見れば、心身共に男は男らしく、女は女らしく創られているのである、それは支配・被支配の関係ではなく、円満な主体・対象の関係であり、真の夫婦の愛を築くための二性である。男性の荘重な愛と女性の優雅な愛が調和することによって、美しい夫婦の愛が実現されるのである。低音と高音、強い音と弱い音などの陽陰が調和することで、音楽の美しい調べが実現するのと同じことである。

⑦ラカンとフェミニズム

ラカンが提示した理論はまさにフェミニズムが待望していた公式であった。しかし、ラカンの主張は巧妙な欺瞞の上に成立していたのである。

ラカンは、「性的関係は存在しない」とか、「女は存在しない」と言いながらも、ファルス機能において、男女に差異があるという。結局、性差を完全に否定することは不可能なのである。

ラカンはまた、ファルスは現実の器官ではないと断りながら、他方では男根を想起させている。これはまさに、お茶の水女子大学教授の竹村和子が指摘しているように、シェークスピアの『オセロ』の中の陰謀の天才であるイアーゴ（Iago）も顔負けの奸計なのである⁽¹⁶⁾。

註

- (1) ジェーン・ギャロップ、富山太佳夫、椎名美智、三好みゆき訳『ラカンを読む』岩波書店、2000年、42頁。
- (2) エリザベス・ライト、椎名美智訳『ラカンとポストフェミニズム』岩波書店、2005年、27頁。
- (3) エリザベス・ライト、『ラカンとポストフェミニズム』4頁。
- (4) ジェーン・ギャロップ『ラカンを読む』107頁。
- (5) 同上、109頁。
- (6) エリザベス・ライト、88頁。
- (7) ソフィア・フォカ、レベッカ・ライト、竹村和子、河野貴代美訳『ポストフェミ

ニズム入門』作品社、2003年、158頁。

- (8) ジェーン・ギャロップ『ラカンを読む』223頁。
- (9) エリザベス・ライト『ラカンとポストフェミニズム』85-86頁。
- (10) 同上、89-90頁。
- (11) 新宮一成『ラカンの精神分析』講談社、1995年、267頁。
- (12) エリザベス・ライト『ラカンとポストフェミニズム』37-38頁。
- (13) 同上、25頁。
- (14) ジュディス・バトラー、竹村和子訳『ジェンダー・トラブル』青土社、1999年、94-95頁。
- (15) エリザベス・ライト『ラカンとポストフェミニズム』、40-41頁。
- (16) 竹村和子の解説、エリザベス・ライト『ラカンとポストフェミニズム』107頁。